

第 7 回日本独文学会関東支部研究発表会

日時：2016 年 11 月 26 日(土) 13:30-18:00 (13:00 開場)

場所：東京理科大学 野田キャンパス 講義棟 K310

☎278-8510 千葉県野田市山崎 2641 (会場のご案内：次頁)

TEL.04-7124-1501 (代)

プログラム

13:30 開会の挨拶：支部選出理事 浅井 英樹

13:35-17:05 口頭発表

13:35-14:10 発表 1 (司会：浅井 英樹、中丸 禎子)

今村 武「ボードマーの文学的共和主義と二人のフュスリ」

14:15-14:50 発表 2 (司会：松鶴 功記、渡邊 徳明)

二藤 拓人「著者なき読書空間としての『断章集』—Fr.シュレーゲルと編集行為—」

14:55-15:30 発表 3 (司会：松鶴 功記、渡邊 徳明)

及川 晃希「トーマス・マン作品と物語の類型—後期の作品を中心に—」

15:50-16:25 発表 4 (司会：須藤 勲、中丸 禎子)

佐藤 宙洋「強調の接頭辞をめぐって:beschützen の be-, verbleiben の ver-」

16:30-17:05 発表 5 (司会：須藤 勲、中丸 禎子)

保坂 直之・坂元 真理子「初修外国語(ドイツ語)学習者が感じる外国語不安の変化」

17:10-17:30 幹事会からの報告

17:30 閉会の挨拶

18:00-20:00 懇親会 百香亭野田店

開場中、上記のプログラムに加えて、書店・出版社等による書籍展示が行われます。

ご連絡

1. 会場予約の関係上、すでに懇親会へのご出席をお決めの方は、下記連絡先までメールをいただければ幸いです。
2. 当日、年会費の納入および新規入会申し込みを受け付けます。

連絡先：eingang@jgg-kantou.org

<日本独文学会関東支部>

支部長 境 一三

支部選出理事 浅井 英樹

会計幹事 渡邊 徳明

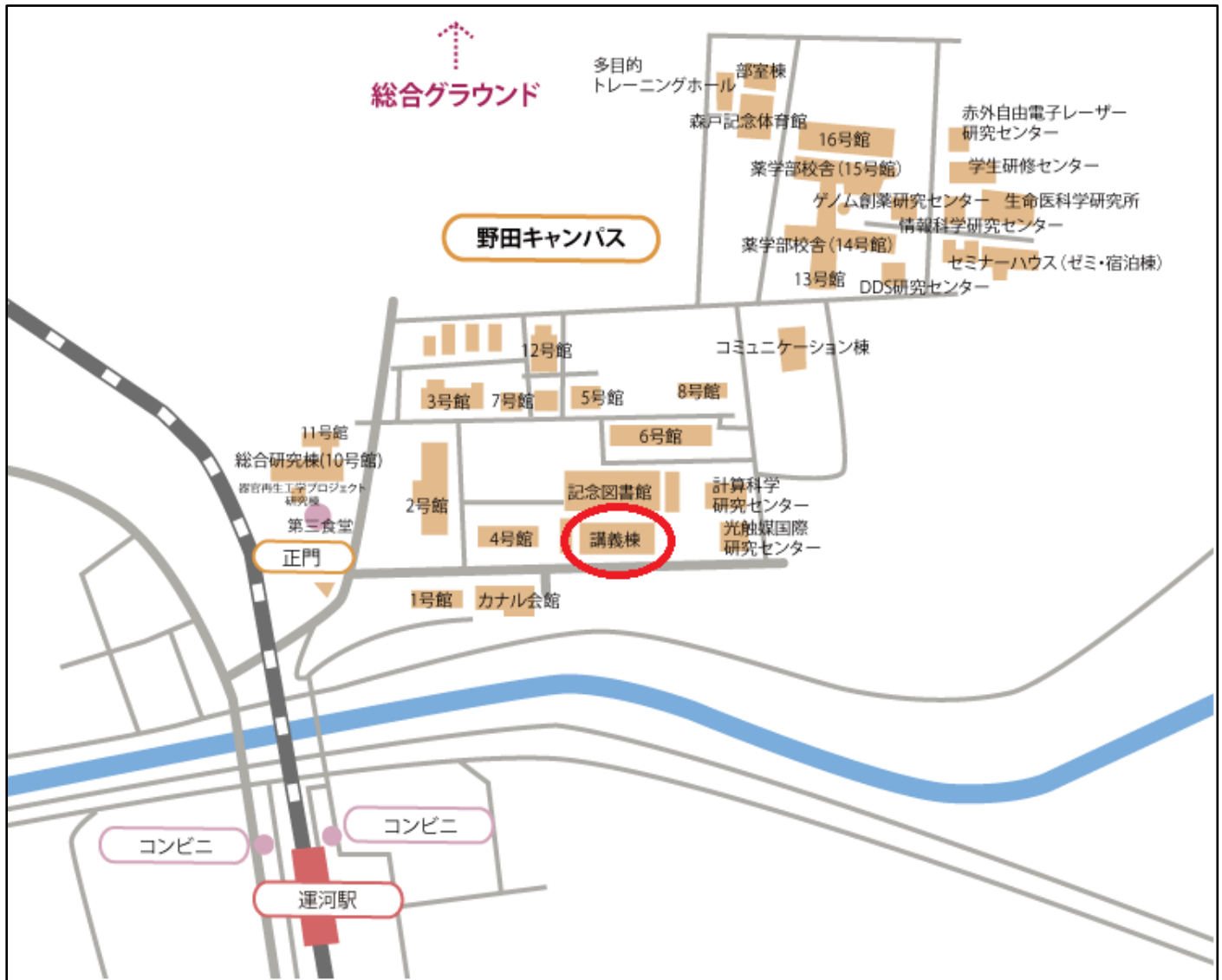
広報幹事 松鶴 功記

庶務幹事 須藤 勲、中丸 禎子

会場のご案内

東京理科大学 野田キャンパス 講義棟 K310

<会場周辺地図>



<交通>

東武野田線（東武アーバンパークライン）「運河」駅下車 徒歩5分

<住所>

〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641

<東京理科大学交通案内 URL>

<http://www.sut.ac.jp/info/access/nodcamp.html>

要旨集

発表1（文学）

今村 武「ボードマーの文学的共和主義と二人のフュスリ」

本発表は、18世紀チューリヒにおいて詩人、劇作家、批評家、歴史家、教育者等多方面で活動したボードマーの創作全般を貫いている「共和主義」を、ボードマーの影響下に成長した同姓同名の二人の若者、歴史家フュスリ（1745-1832）と詩人・画家フュスリ（1742-1825）、との関係から解釈を行う。「ドイツ文学史」で常に言及される18世紀中葉のドイツ語圏スイスとライプツィヒとの間の文学と詩的想像力に関する論争は、新しい文学世代登場の契機となる。この文学論争は、スイス派の底流にある「文学的共和主義」の存在をクローズアップさせている。

歴史家フュスリは、後に故郷チューリヒでボードマーの後任の歴史学教授となるが、もう一人のフュスリは、啓蒙の受容、社会との軋轢、出奔、芸術他分野での活動、という疾風怒濤の典型的な生涯をおくる。二人のフュスリは共にボードマーと師弟関係にあり、1762年に起こるグレーベル事件に決定的な関与をしている。ボードマーの文学的共和主義は、17世紀以降のチューリヒの経済的発展とそれに伴う道徳的退廃傾向への対抗手段であり、チューリヒ啓蒙の一つの頂点としてグレーベル事件は発生した。この事件から顕著となるチューリヒ文学の「第二世代」二人のフュスリの創作活動の分析を通じて、スイスの「文学的共和主義」を説明したい。

発表2（文学）

二藤 拓人「著者なき読書空間としての「断章集」—Fr.シュレーゲルと編集行為—」

本研究は、フリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）におけるFragmentということばを「全体性」（Totalität）との対概念である「部分性」（Teil）つまり〈断片〉としての美学的・観念的な概念規定（ニピック 1984、オスターマン 1991）には接続させずに、〈断章〉というアフォリズム形式の一種としての理解に限定し、そのメディア美学的な意義を論究する。

シュレーゲルが生涯にわたりこの筆記方法、思考様式を好み、初期に出版された断章形式の諸作品の他に2万点を越える遺稿断章群を残していることは有名である。この手稿段階における彼の書法、思索過程の独自性が近年注目される一方で（高次 2015、ベネ 2015）、兄アウグストとの共編雑誌『アテネウム』に収録された「断章集」（1798）において、編集者としてシュレーゲルが強調した書式面での特異な注記事項はあまり知られていない。つまり彼はここで、各著者の匿名性を厳守させた上で、活字の体裁・配置・構成を限りなく簡素にするよう指示している。本発表ではこうした条件で成立した「断章集」を、前者の原稿段階のものと区別して〈活字版〉断章と規定し、これが当時の一般的な出版物と形式的に異なることを示し、それが如何なる困難を読者層に与えたかをメディア理論の観点から分析する。このような意味での断章形式が、1800年頃のメディア文化がもたらした統一的な〈作家〉を前提とする黙読という「訓練された遊戯空間」（キットラー 1980）を不可能にする機能を備えているというのが、本発表で立証したい仮説である。

発表3（文学）

及川 晃希「トーマス・マン作品と物語の類型—後期の作品を中心に—」

本発表では、トーマス・マン作品と物語の類型の関係について後期の作品を中心に扱う。それにより、マンがいかに、典型的な物語の筋に、生産的なモチーフを組み込んで作品を作り上げた作家であるかを明らかにしたい。このことは、マンという作家が、多くの作品において難解なテーマを扱いながらも、広く読者を獲得したことも関わっている。

ヴラジーミル・プロップを始めとして、20世紀においては物語の類型的な把握の試みが、様々な理論家によって行われたが、本発表では、類型という観点から、マンの『ヨゼフとその兄弟たち』（1933-43）、『ファウストゥス博士』（1947）、『選ばれし人』（1951）を取り上げる。

マンと類型というテーマについては、主に神話との関係という観点から、先行研究でも扱われてきた。例えば、『選ばれし人』とオイディプス神話の関係について扱った Böschstein(1997)の研究があるし、『ヴェニスに死す』(1912),『ヨゼフとその兄弟たち』などマン作品に繰り返し現れるヘルメスモチーフについては、Dierks(1972)を始めとして数多くの先行研究がある。マン作品と神話については、近年でも Wimmer(1998), Dürr(2006)らの研究がある。

先行研究は、マン作品にどのように類型的なものが表れているかを指摘するに留まっているが、本発表ではマンが類型的なものを作品に導入するに際してどのように陳腐化を避けているかも明らかにしたい。

発表4 (語学)

佐藤 由洋「強調の接頭辞をめぐる：beschützen の be-, verbleiben の ver-」

発表者は、修士論文において、従来の研究で用いられてきた接頭辞のいわゆる強調力カテゴリーというのは、接頭辞の、他の複数の基本的な意味的・機能的カテゴリーに還元できる、という仮説を提示した。この仮説をさらに論証することが、本発表の目的である。その為に、「強調」の接頭辞動詞群の中で最も代表的と言える2例、beschützen と verbleiben を考察対象に選ぶ。

本発表では第1に、それら2つの接頭辞動詞と、その基盤動詞との意味用法の違いを、語法研究を含む先行研究を参照し、コーパスに基づく実例分析をすることで解明する。それによって、beschützen は、中立的な schützen とは異なり、「強いものが弱いものを守る」という意味であること、verbleiben は、語義が2つに分けられ、一方では「残り物になる」という変化を表し、他方では「予期に反して残留する」という意味を表すことが示される。

第2に、解明された差異を手がかりして、該当の接頭辞には、いかなる意味機能が認められるかを考察する。その結果、beschützen の be- は、他動性を高めていること、verbleiben の ver- には、übrig で言い換えられ、über- と競合する意味機能が、gegen die Erwartung で言い換えられ、「基準からの逸脱」という意味機能かのいずれかを想定できることが示される。代表例に照らしても、還元仮説は妥当と言える。

発表5 (ドイツ語教育)

保坂 直之・坂元 真理子「初修外国語(ドイツ語)学習者が感じる外国語不安の変化」

外国語学習者には外国語を使って言葉を交わすことそのものへの不安があることが、主に英語分野での90年代の研究で明らかにされた。本研究の最終の目標は、対人関係を上手に営むための練習として初等教育でも使われるソーシャルスキル・トレーニングの発想を入れて、教室での外国語不安を取り除く教授法の開発にある。

今回の発表では初修外国語(ドイツ語)学習者の外国語不安のありようを FLCAS(外国語教室不安測度; Horwitz 1986)をもとにした質問紙法で調べ、不安の緩和を目指したアクティビティを多用する授業において、学習者の不安心理が1年間でどのように変わるかを報告する。

「自ら進んで外国語でコミュニケーションをしようとする態度」を外国語学習の目標に設定する WTC モデル(MacIntyer 1998)では、外国語の運用能力を高めると同時にコミュニケーション不安を緩和することの効果が言われている。日本独文学会によるドイツ語教育の実態調査(2012)でも、ドイツ語を使って言葉を交わす、心を通わせる能力への期待が学習者には見られる。

本研究では2015年度から質問紙による調査を4回行っている。4回目の調査で明らかになったのは、英語学習者などに見られる外国語不安はドイツ語の学習を始めたばかりの学生にも見てとれ、それが1年後に緩和されていく様子である。初修外国語の授業における WTC モデルを反映した授業の方法やカリキュラムデザインの可能性なども提案したい。